上代日本仏教における誓願について

——造寺造像伝承再考——

石井 公成

寺院の縁起類や仏像の銘文などは、天皇・聖徳太子・皇族などとの関係を仮託して権威づけをはかりがちであることは良く知られている。しかし、縁起や銘文は、何らかの文献資料や口頭伝承、他寺の縁起や銘文などに基つき、多少もしくは大幅に改変して作り上げるのが通例である。史実を比較的正確に伝えているものであればもちろんのこと、疑わしいとされる縁起や銘文であっても、その材料となった古い要素が残されている場合は決して少なくない。そうした例の一つとして、ここでは上代の誓願を取り上げることとする。誓願は、寺院や仏像を建立する際の重要な要素でありながら、これまででは誓願について記す個々の資料の年代や真偽を論ずるのみで、上代における誓願の全般的な特色については、ほとんど検討されていないためである。また、追善を中心とする現代仏教を基準にして上代仏教を考える傾向に疑問を呈するためである。

結論を先に述べると、上代における誓願の特徴として、次の六点をあげることができる。

- (一) 誓願を述べる言葉そのものに威力が認められており、誓願した時点で即時の劇的な効果が期待された。
- (二) ウケヒ・言ホギその他、言葉そのものの持つ靈力を重視する在来の習俗・信仰が誓願流行の背景となっていた。
- (三) 生存中の人の「奉為」になされることも多く、その人の浄土往生を願って寺院や仏像の建立を誓願する場合でも、死後になってから発願するとは限らない。延命と往生とを同時に願うのは、しばしば見られる形式であった。
- (四) 天皇や天皇に準ずる皇族にかかわるような誓願は、集団でなされることが多く、参加者が多いほど効力があると信じられていた。
- (五) 公の場での誓願には誓約としての性格があり、天皇などの「奉為」と称する誓願は、忠誠を誓う服属儀礼でもあった。

内 早い時期の大きかりな誓願・誓約の類には、常に蘇我氏がかかわっていた。

以下、個々の特色について検討していくが、上記の特色をすべて満たすという点で、法隆寺金堂釈迦三尊像銘は、上代の誓願の典型的な例と違ってよいであろう。なお、本稿で取り上げる文献や銘文は、年代その他について論争のあるものが多く、筆者も自分なりの考えを有しているが、紙数の制約のため、ここでは詳しく論じることせず、『日本書紀』成立以前であることが明らかなものとして扱うことにする。

まず、(一)については、法隆寺金堂釈迦三尊像銘にしても、『日本書紀』が伝える四天王寺建立をめぐる記事にしても、重病あるいは戦争という緊急時に際しての誓願であることが注目される。生死にかかわる状況で劇的な効果を望む場合は、単なる祈願ではなく、困難な事業の実行を誓う誓願によるほかないと信じられていたのである。そうした緊急時の誓願は、仏像などの完成後にその功德を頼みとして願意を述べる場合の願とは区別する必要がある。また、誓願の力を重んじる点は同じでも、後代の仏教説話が、願いをかなえてくれる特定の仏菩薩の慈悲や力、あるいは発願者の信心の強さなどを力説したり、誓願すれば時間がかかっても必ずかなうことを強調するのは異なる点に注意すべきであろう。上代の誓願、特に仏教受容の最初期において大事であったのは、造寺

造仏を誓うことそれ自体であり、いずれの仏や菩薩に願うか、いずれの仏像を造立するかといったことは、後代のような形では明確に意識されていなかったと考えられる。

(二)については、当時の誓願は、言葉そのものの霊力を深く信じ、軽率な「言挙げ」を恐れる風潮のもとでなされたことを念頭に置く必要がある。寺院や大きな仏像を建立するという難事業の実行を敢えて公の場で誓うに当たっては、その緊張が強ければ強いほど、誓願の言葉がもたらす効果を強く期待されたことであろう。時代とともに言葉自体に対する古代的な信仰が薄れ、神仏の慈悲や当人の信心ぶりが重要視されるようになる点、要求の即時の実現が信じられなくなる点などにおいて、誓願の歴史的变化は、ウケヒや夢の変化の過程と平行しているように思われる。

(三)については、七世紀半ばすぎの資料になるが、信頼できるものとして、野中寺弥勒菩薩像銘に見える知識たちの誓願(六六六年)や、天武天皇不予に際しての「僧正僧都及衆僧」「諸王臣」「親王以下逮于諸臣」らの度重なる誓願(六八六年)を挙げることができよう。こうした形の誓願の早い例としては、六〇五年に推古天皇の詔によって「皇太子・大臣・諸王・諸臣」が「共同に誓願を発して」銅と繡の丈六仏像を作ったという記述(推古紀十三年四月)がある。これは疑われないこと多い箇所だが、天皇の意志を強調している点を潤色と

して除けば、蘇我馬子が「(推古)天皇の奉為に」丈六の繡と銅の仏像を造ったという記述(孝徳天皇大化元年)と矛盾しないと思われる。馬子の主導のもとで天皇の奉為と称する誓願が皇族や臣下たちによってなされ、仏像自体は馬子が多数の技術者を動員して完成させたと見るべきであろう。

なお、四天王寺建立をめぐる誓願の話は、蘇我氏主導による多人数の誓願という形式から見直す必要がある。筆者は、登場人物の位置づけや状況設定はともかく、戦闘に当たって何らかの形で戦勝祈願がなされるのは当然と考えるが、当時において最も強力と思われたのは、新来の仏教による誓願であったろう。また、『日本書紀』に見える聖徳太子の誓願内容と馬子の誓願内容は、一つの誓願を無理に二つに分けた形跡がある。

四については、ある人の臨終に際して延命の為、往生の為、あるいは延命と往生との為に周囲の者が誓願するとすれば、仏像や寺塔の完成はおろか、着手すらなされないうちに死んでしまう場合がほとんどであり、結果としては追善の事業となってしまうことが多いのは当然であろう。仏像や伽藍がその人の死より後、それも何十年も後に完成していようと、それは生前に誓願がなされなかったことの証拠にはならない。法隆寺の命過幡のうちに、年月日に続いて亡くなった者の氏名を記し、「誓願に依りて」あるいは「願に依りて」幡を敬

造したと述べている例が見られるのは、臨終の際になされた誓願を果たすために死後に遺族が幡を造立したことを示しているよう。新羅で盛んに注釈が造られた『大灌頂経』その他に基づく様々な延命儀礼や臨終儀礼が、日本では七世紀半ばには民間でさえかなり流行していたことは見逃せない。誓願の対象が天皇であれば、病気の場合よりも、日頃からその生命力の充実が願われたことであろう。自国の当代の国王、ないしは他国の当代の国王の為の造寺は、中国でも朝鮮でもしばしば見られるものである。上代の誓願については、臨終儀礼あるいはタマフリなどといった側面からも考察する必要がある。上代の資料に見える仏像や寺院にかかわる年月日については、発願の時か、奉為を願われる人物の死亡した時か、仏像や寺塔の起工式の時か、完成供養の時かといった区別が明確にされていない現在、仏像や寺院の完成が遅いことをもって誓願に関する記述を否定するのは危険である。大きな仏像や伽藍の完成には長い年月を要するのであるから、時間の経過とともに、願意や主導者が変わってくるのは当然であろう。緊急時が終わっていけば、造立の功德によって誓願の参加者や一切衆生が往生・成道することが元来の目的とならんで願われるのは不思議でない。また、「某の奉為に敬造した」といった伝承は、某の発願ないし命令による建立などという形に書き換えられがちであること、蘇我氏と関係の深

い寺は特にそうであったことは言うまでもない。

(五)については、『日本書紀』を見れば、君親の恩に報いるために各氏族が寺院の建立を誓願し、完成させること、その寺において戒を守って身を清らかに保った僧尼が天皇の奉為の祈りをなすことが、時代とともに次第に強制的なものとなっていたことは明らかである。推古二年の三宝興隆の詔の条に、「是の時、諸の臣連等、各の君親の恩の為に、競いて仏舎を造る」をあるうち、「競いて仏舎を造る」というのは文飾であろうが、最初期に瓦葺の寺を建立したのは、天皇の外戚となり、次々に天皇を擁立することによって権力を確立した蘇我氏および蘇我氏と関係の深い氏族のみであったこと、

宮殿にほど近い地に城砦ともなりうる伽藍を建立するには疑いをかけられぬよう配慮する必要があったことなどを考える時、「君親の恩の為」という言葉は見逃しがたい。批判的文獻史学者が、天皇を仏教興隆の主体とする『日本書紀』の記述を疑うのは妥当だが、初期の寺は祖霊追善のための氏寺であることを強調し、「君の為」という面を後世の仮託としてすべて否定しきるのは行き過ぎであろう。六朝や隋唐の膨大な銘文が示しているように、国王の奉為を強調することと祖先の往生を願うこととは、両立不可能な事柄ではない。推古三十二年（六二四）に各寺の「造寺の因縁」が登録されるべきものとなったことも、造寺に際して「天皇の奉為」という点を

強調させる一因となったであろう。

なお、大化の改新以前では、天皇の奉為を願う臣下の誓願は、天皇を擁立していた仏教興隆者、蘇我氏の路線を承認する誓盟でもあったろう。皇帝の奉為をしきりに謳う中国の銘文の中でも、東魏や西魏のものには、傀儡である皇帝に続いて記される有力者の奉為を意識した誓願の例が見られるが、上代日本の場合、「嗽加〔蘇我〕大臣」の為に「誓願」して造られ、その功德によって「七世父母」その他の成覚を願う佛像の銘文（法隆寺釈迦如来及脇侍像銘。六二八年）が存在する事実はきわめて重要である。

(六)については、これは、仏教受容の主体は天皇であったことを強調し、史実を書き換えようとする『日本書紀』ですら蘇我氏の関与を否定しきれなかったことを示すと同時に、蘇我氏の信じた仏教の性格を示すものでもある。『三国遺事』阿道基羅の条が示すように、王女の病に際しての「焚香表誓」が新羅での仏教流布のきっかけとなったとされているのを始めとして、三国時代の朝鮮仏教ないし当時の朝鮮の習俗では、誓願・誓約の類がきわめて盛んであったことは、金石文や多くの説話が示すところである。蘇我氏の仏教は、そうした渡来人たちの仏教に基づくものであった。（註略）

〈キーワード〉 誓願、追善、奉為、氏寺

（早稲田大学非常勤講師）